一学校博物館の起点　～基礎研究ノート･コレクターの軌跡から～

梅光学院大学博物館
学芸員　佐　藤　睦　子

1　はじめに

梅光学院大学博物館（以下本館）は学院移転に伴ない、2003年３月山林・田園風景が残る下関市吉見地区から、市内の文教地区である向洋町へと移転、次年度には新装開館の予定でその準備を進めている。また併行して移設のための資料確認・整理作業も行い、収蔵資料の調査不足が少なからず明確化した。個別資料による学術研究や個人コレクションとしての個人的かつ時代的背景や諸相を絡めての調査研究が脆弱な場合、移転新生する本館の向後を想定する時、致命的な材料にしかなり得ない。1986年以来前身「博物館学資料室」の開室を経て、本館は試行錯誤の館活動と運営内容を改めて省み、自館の足もとを見直す契機を迎えている。 そこで、見直す作業の一環として、1914年（大正３）「梅光女学院」が開校時に設置した「標本室」と「展覧室」の資料内容と活用調査、そして初代学院長・広津藤吉が収集したコレクションの全容を寄贈・展示予定であった「梅光女学院博物室」（以下「博物室」）の実態調査を行い、コレクションの全容を追跡、裏付け調査を開始した。何れも1998年（平成10）開催の展覧会、第4回企画展「BAIKOむかし・いま・みらい－梅光女学院と近代女子教育－」がその作業の基礎ベースをなしている。本稿は、特に収集家・広津藤吉の側面と、収集活動の経緯および収集資料を中心に、「博物室」実態・基礎研究ノートの小記としたい。

2　広津藤吉コレクションと梅光女学院博物室

本館の主な所蔵資料の一つである、広津藤吉が収集した「広津コレクション」は、伝マリア観音、キリシタン禁令高札など、キリシタン関連資料を中心としたものが多い。数多の本学学院史によると、1900年代前半、梅光女学院には学校博物館もしくは、それに相当する施設の所在が記録され、また本館が所蔵する以外の、もう一つの「広津藤吉コレクション」の存在を明らかにしている。以下は梅光女學院刊行の、黒木五郎著『梅光女學院史』（1934年）、藤山一雄著『廣津先生の生涯』（1951年）、廣津藤吉著『私の横顔』（1952年）をはじめ、その他、関連資料等で補完し、広津藤吉の収集略歴と合わせて「博物室」関連資料の記事を各項目に分けまとめて、その概略を記したい。

（1）広津藤吉と植物採集　広津藤吉［1871年―1960年］は豊前中津町（現・大分県中津市）に生まれ、宣教師ヘンリー・スタウトが長崎で開校した東山学院神学部を卒業。1901年（明治34）長崎・梅香崎女学校校長に任命された。1902年頃から健康維持のため登山を始め、島原雲仙の植物採集会に参加、植物分類学者の田代善太郎(当時長崎県立高等女学校教頭)と交わり、植物採集・分類学に造詣を深めた。1909年（明治42）～1911年（明治44）には牧野富太郎博士（当時東京帝国理科大学講師）が指導する徳島県剣山植物採集会、鹿児島県下植物採集会、大分県祖母山植物採集会等の講習会に参加した。この時期に収集した植物の腊葉標本は羊歯や鮮苔類も含め、二千余点に達した。また博物家・金子一狼を通じて長崎の水産物、魚類、珊瑚、蟹類を収集し、自ら昆虫類も採集した。1911年（明治44）、旧スタウト邸敷地と梅香崎女学校を合併後、機械標本室3室を設け、植物温室1棟が建設された。

（2）梅光女学院開校と学内外展覧会　1913年（大正2年）東山学院・梅香崎女学校両校創立25周年記念祝賀会が4日間行われ、うち2日間は「両校共成績品展覧会」が公開された。梅香崎女学校からは博物標本と同校出身で数多く文展入選を果たした日本画家の栗原玉葉と同校教諭大久保玉岷の絵画が出品され、好評を博したという。1914年（大正３年）、光城女学院(山口市)と梅香崎女学校（長崎市）の合併校として、日本対外交渉の玄関口・山口県下関市関後地村（現下関市丸山町）に「山口県私立下関梅光女学院」（英語名：スタージェス・セミナリー）を開校した。広津藤吉はその初代学院長となる。学院の引越しでは下関に向けて毎日数十台の大貨物が長崎駅に運び込まれ、その中には数千個に及ぶ博物標本が含まれた。

下関の新校舎は本館（ケネディー館）、理科館、寄宿舎（のち梅香寮と命名）、西洋教師館、体操室に分館され、標本資料の大半は理科館内の「機器標本室」で理科教材として管理、保存活用されたと推測される。また本館（ケネディー館）には「展覧室」が設けられている。　同年6月5日開院祝典の開催と共に生徒の成績品、自然科学の教材、絵画などの教育教材が、本館教室、理科館、展覧室にて展示されたという。1915年（大正4）3月22・23日には成績品展覧会を開催、学院及び市内各学校の出品物を展示している。同年長崎時代から植物採集等で親交のあった長崎県立中学校教諭の山崎又雄を、前任者病死によりその後任者として着任した。　1920年（大正9）10月、山口県教育会主催の教育品展覧会に学院から出品した富士山植物分布図、珊瑚族標本の二点が優良品と表彰された。前者は広津が娘2人を伴い「世間の様子の実際と活きた地理を知るため」の「強硬教育」の一環として富士登山した際に採集調査した成果である。教材教育の姿勢とその効果が認められた結果の一つといえよう。

（3）火山弾発見　1916年（大正5）年、山崎と共に自然科学資料の収集活動を拡大した。「自然科学に対する興味を学生に鼓吹するため」と採集した山口県下の鉱物、植物、魚鳥、昆虫類の採集点数は「優秀品のみで植物資料698点、動物資料437点、鉱物資料76点」と記されている。また、広津と山崎は同年4月植物採集を目的に下関市外生野村字椋野にて散策中、火山弾を発見。庭石となるところを「学校の標本に供すべく懇望の末、終に承諾を得て牛車に積み帰」り、山崎は関山・石山・一里山・飛山・太平山に至る一帯の地質踏査を実施した。その結果、噴火は第三紀時代に相当し、上述の山々に複数の火口跡を有する玄武岩質の火山であることを、報告書「椋野村産火山弾に関する研究」にまとめ、東京帝国大学理科大学、京都帝国大学分科大学等の地理学の学術研究機関や県下の防長教育博物館へ火山弾と報告書を届けたという。現在、収集した火山弾の一部は丸山町・梅光女学院中学・高等学校構内にて保管されている。

（4）海外視察と幻の博物室（梅光博物館）　広津藤吉は、学院が所在する下関の地の利と、定期航路船の利便性から、留学生教育を一つの使命に朝鮮、満州、中国、台湾から学院入学の道を開くため、学院長として数回訪問している。1915年（大正4）11月に18日間の日程で朝鮮半島南部・釜山から鎮海湾、大邸、大田、京城、龍山、平壌、北部・新義州まで各地を巡り、教会、学校等を視察、その合間で各地の各種教育教材を入手している。1918年（大正7）8月には33日間の日程で朝鮮半島、満州にて観光と視察、講演演説27回、説教、梅光同窓会員への慰問を精力的に行っ

ている。この機の収集は自然科学、歴史、民俗地理に関する教材、古書、髪飾、各地の民俗資料をはじめ「トランクや採集袋は日日にふくらみ、王侯旅行荷物の如くなった」という。その後も植物採集、古瓦、考古遺物、古銭、古書、民俗人形、玩具等、多種にわたり晩年まで資料収集が続く。在職中に収集した数多資料は広津によると当時の標本室や展覧室以外の学院内に「梅光独特の博物室を二三室設ける積にて準備中」であったことが度々記されている。しかし1945年（昭和20）８月、第二次世界大戦（大東亜戦争）の下関集中戦災の折、学院施設は1941年（昭和16）に建設した広津記念館を残し全焼した。「博物室」内に保管、展示されるはずであった資料も、広津藤吉がのちに「梅光博物館の蔵品は九分以上焼失」の被害に見舞われたと語っている。

本館へ広津藤吉没後に受贈された「広津コレクション」の大半は、類焼を免れた広津邸宅に保管されていた個人所蔵の資料で、現在もその資料の多くは裏付け調査中である。焼失した、この1900年代前半期収集資料の全容は、「広津コレクション」や当時の記録、写真および記念事業による展覧会目録、数多の学内刊行物によって、その輪郭を僅かに辿ることができる。なお「博物室」収蔵予定の資料とそれら詳細は、調査進展をふまえ別稿に譲りたい。

3　おわりに

これまで広津の資料収集の経緯を半ば断片的に記してみると、「博物室」と上記の収集活動は、広津個人的関心と研究による観が強い。その活動全般は教育者、即ち梅光生徒が学校教材を実際に観察し、生徒自身の学習意欲につなげる手段として活用、そして「博物室」において実地教育と教材教育の相乗効果を奨励すべく準備がなされていたと推察できる。また、収集資料は広津の学問・博物に対する研究姿勢や探究心、その実践力など、身を持って生徒に知らしめる教育姿勢とその態勢の証とも言えよう。

また、一方では明治・大正期の教育的かつ社会的事情が、文部省による学校教育の補完を意図した「教育博物館」設立、「博物館学の父」と言われる棚橋源太郎の提案で設立した「博物館事業促進会」や「通俗教育」という動向や山口県教育会の動きによる影響も少なからず推測できる。加えて、キリスト教主義学校・私立梅光女学院がおかれた明治期以降は、「国粋思想の消長とキリスト教伝道、また教育の問題は時代と共に微妙な対立、緊張、融和を繰り返し」（梅光の130年編集委員会編『梅光の130年』2001年）た教育・社会情勢の下であったことなど、両者の時代的に通有する「近代」と政策的因果関係やその事柄は、学校博物館問題の諸相を考察する上で、今後も一つ一つ慎重かつ丹念に比定していく作業の必要性を感じる。今後も継続調査を進めたい。

本館所蔵の「広津コレクション」は、結果的に「博物室」へ収蔵されることなく、広津藤吉の個人的資料となったが、それらは学院史的資料に位置し、本学における一学校博物館の萌芽期を語り、その教育的活動の起点を語る資料の一つであるといえよう。

歴史の道「山代街道」調査報告書の刊行

山口県文化財保護課
文化財専門員　山　﨑　一　郎

歴史の道調査は、江戸時代以前の古道を対象に、道と道周辺の文化財を総合的に調査し、その保存と活用を図るための基礎資料作成を目的に実施しているものである。これまで県教育委員会では、昭和55年度の萩往還調査を皮切りに、以後、山陽道（昭和56～57年度）、赤間関街道（平成5～7年度）の調査を行い、平成12年度からは山代街道を対象とする調査を実施して、13年度にその成果を『歴史の道調査報告書４　山代街道』として刊行した。

山代街道は、江戸時代、城下萩と隣国安芸に接する秋掛村亀尾川（現美和町亀尾川）をつなぎ、現在の福栄村市、むつみ村、阿東町生雲、徳地町柚木、鹿野町鹿野、徳山市須万、錦町広瀬、本郷村本郷、美和町秋掛を通った全長24里余、約100kmの道である。萩往還や山陽道が大道にランクされたのに対し、この街道はそれに次ぐ中道にランクされ、「山代道」「奥往来」などとも呼ばれた。紙の産地であった山代（現在の玖珂郡・都濃郡北部一帯）と萩をつなぐ道として藩が重視し、その一部は藩主や幕府巡見使などが領内巡見を行う際にも利用された。また、国境の亀尾川を越えれば隣国安芸へと通じ、石見国へ向う石州街道が何本も交差するなど、国境を越えて人・物が交流した道でもあった。

報告書では、「総論編」「各論編」で街道の歴史、地理、街道周辺の町並みや建造物について考察を加え、「地区編」で各地区の街道の現況をまとめている。また、「資料編」には「山代街道と周辺文化財等地図」「山代街道沿線の関係文化財等一覧」などを載せ、調査で明らかとなった街道全ルートと、街道周辺に所在する国県・市町村指定文化財、一里塚・道標や廻国碑などの道関連の遺跡、建造物など300におよぶ文化財を紹介している。

萩往還のケースでは歴史の道調査をきっかけとして道の整備が進み、街道沿線の市町村の地域おこしに大いに貢献した。山代街道についても、この調査を契機として様々な活用がなされることを期待している。

なお、平成14年度からは新たに石州街道の調査を開始した。この調査は、津和野と小郡をつなぐ国道９号線沿いのルートをはじめ、計６本の石州街道を対象とする調査である。石州街道は萩往還や山陽道と同様に大道に位置づけられていた道であり、こちらについても調査成果が大いに期待される。

（本報告書は山口県文化財愛護協会から販売中
2,500円　Ａ４版252頁　カラー8頁）

山代街道と中ノ川山一里塚（県史跡・美和町）

博物館協会ホームページの制作

山口県立山口博物館
副館長　宗　清　禮　吉

1　はじめに

昨年度の第2回理事会で、山口県博物館協会ホームページの開設の必要性が協議され、今年度総会の協議題の一つとされた。周知のとおり、今年5月の総会において、「山口県の博物館」（通称ガイドブック）の改訂廃止を決定するとともに、その代替手段としてホームページ制作が決定された。ただし、ガイドブック並みのボリュームとするのでなく、毎年作成している「ミュージアムガイド」を拡張した程度にすることとし、詳細な博物館情報については、協会作成ホームページから各館作成の独自ホームページにリンクを張るなどすることが承認された。協会ホームページの内容、制作等は事務局に一任された。

2　制作に当たっての基本的な方針について

各館の詳細な内容を記述したホームページは、かなりの館が独自の詳細なホームページを公開しているし、制作経費もかなりかかるので、得策ではない。したがって、各館の展示内容及び企画展（特別展）の情報、位置、開館時間、休館日等の情報などを中心としたボリュームの小さいホームページを制作することとした。そうすることで、現在限られた予算とスタッフで運営している博物館協会事務局の負担が最小限度に抑えられる。

制作の過程で、事務局の負担が最小の状態を保ちながら、最大限の情報量を提示できるようなホームページの方向性を常に検討しつづけた。その結果、後述するように、参加各館の情報や一般の方々からのリアルタイムな情報が提供できる「掲示板」の機能充実を行うのが最適であると考えた。

また、画面構造はできるだけシンプルなものにし、児童生徒やお年寄りなども見やすいように文字はできるだけ大きくし、分かりやすいアイコンを設けるなど工夫をした。

3　他県の博物館協会ホームページの調査について

滋賀県博物館協会事務局が検索エンジンを利用して全国の博物館連絡組織を調査した結果がホームページ上に公開されている（http://www.ibm.go.jp/kenhaku/links.html）。それによると、連絡組織（県単位の博物館協会など）が独自にホームページを運営している例が12例ある。その他、加盟館有志や第三者などにより加盟館情報が掲載されている例が11例ある。前者の連絡組織が運営している12例のうち、準備中のものが1、県単位でなく特定の地域のネットワーク的な協議会のものが2あるので、県単位の博物館協会が開設しているホームページは9例である（当県は省く）。この9例について、機能的な内容を著者が独自に詳しく調査すると、次ページの表のとおりであった。

掲示板を有するものが2例あるが、機能的には外部の誰でも書き込める自由なコミュニケーションを成立させる単純なものである。

県博物館協会ホームページの掲載内容（その内容を持つ館の数）

博物館協会の事業の紹介	各館の基本的情報	ホームページ開設館へのリンク	各館を検索する機能	企画展・特別展等情報	掲示板	その他
1	7	7	8	3	2	5

この表からも明らかなように、各協会ホームページを概観すると、内容的に乏しい感が否めない。この表にあげる全ての掲載内容（機能）を満たしている協会は皆無であって、この掲載内容（機能）のほぼ半分を備えているのが4協会であった。

4　本県博物館協会ホームページの掲載内容と構造

ア　協会ホームページに必要な基本的な掲載内容

県内70館に共通する情報を掲載する博物館協会ホームページの内容として次のようなものが必要であると著者は考える。

①山口県博物館協会について（協会の紹介、事業内容）

②各館の一般的な情報（館名、住所、電話、ＦＡＸ、位置情報、簡単な展示内容、開閉館時間、休館日）

③企画展（特別展）情報

④講座情報等

この中で、②、③については、当協会発行のパンフレット「ミュージアムガイド」に掲載されている内容である。④については、実施期日が迫ってきて始めて内容がはっきりしてくるものが多く、年１回発行の「ミュージアムガイド」では対応できない。

イ　協会ホームページの発展的な内容

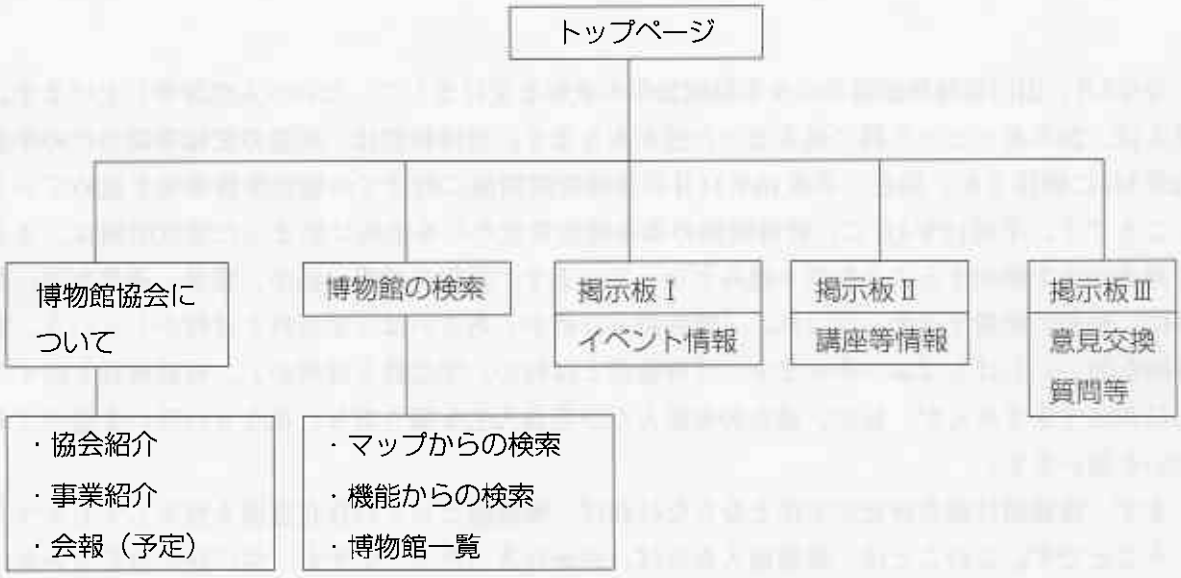
基本的な掲載内容以外に、望ましいものとして、博物館関連組織へのリンク情報（ＵＲＬ）がある。その他、前述したように、事務局の負担を押さえながら、掲載情報を増加させるための工夫として、各館が情報を書き込める掲示板を設置することを考えた。しかも、情報をできるだけ整理するためと、書込み情報の保護等のために、①イベント情報(企画展、特別展など）、②講座情報（教育普及活動）、③意見交換、質問等の3種類の掲示板を設けることとした。

①、②については、特に偽情報等を書き込まれると困るので、70の館のみが書き込めるようにパスワードで書込み制限を行う。③については、原則的に誰でも書き込めるが、好ましくない言葉が含まれている内容は排除することが望ましい。

更に、掲示板の機能として、画像をアップロードできれば、各館企画展等の情報量が飛躍的に増大する。

以上の検討結果から、当県の協会ホームページの構造を次のように設計した。

ホームページの構成



5　制作環境

制作に利用したソフトウェアは主にＩＢＭ社のホームページビルダーVER６．５である。このソフトウェアの機能は多彩であり、付属の画像作成ツール等も充実しており、大変操作しやすい。

プロバイダーは、数社について検討した結果、ホスティングサービスが充実していて、しかも手ごろな料金であることから、TikiTikiインターネット（株式会社エヌディエス）とした。借用しているサーバーの領域は、da.rs1.on.tiki.ne.jp/home領域である。少し長いが、独自ドメインを設けることも別途料金を払えば可能である。

6　おわりに

県単位の博物館協会ホームページは開設例も少なく、内容が不十分なものがほとんどである。この理由は、開発経費が無いことやスタッフの不足等が考えられる。ましてや、年度途中の最新情報への更新等は不可能に近い。本報告では、掲示板の設置で最新の情報更新を行うことを試みた。しかし、現在もなおインターネットに未接続の館も多く、それらの館の情報をどのように反映するか今後の課題である（ＦＡＸ送信後事務局で入力等も検討中）。

自由書込み掲示板の用途は、様々な情報提供の場、問題についての討議の場、レファレンスとしての活用など、多様な活用が考えられる。新たな試みなので、今後とも書込みの状況を見守りつつ、望ましい方向へ発展させていきたい。

備考：山口県博物館協会ホームページＵＲＬ　http://www.da.rs1.on.tiki.ne.jp/

思いつくままに

萩市郷土博物館
館長 樋口尚樹

今年5月、山口県博物館協会の永年勤続20年の表彰を受けまして、たいへん感謝申し上げます。思えば、20年あっという間に過ぎ去った感があります。当博物館は、国道の拡幅事業のため平成12年3月に解体され、現在、平成16年11月の新博物館開館に向けての建設準備事業を進めているところです。平成12年4月に、新博物館の基本構想策定から本格的に始まった建設準備は、まるで過去20年を凝縮するような取り組みとなっています。建物の建築、展示、管理・運営など、具体的に建設の準備を進めるにつれ、「博物館とは何か」あるいは「学芸員とは何か」という、根本的な問いにしばしばぶつかります。「博物館とは何か。学芸員とは何か」。模範解答を出すことは到底できませんが、私が、過去20年歩んだ学芸員人生を振り返り、私なりの思いを述べてみたいと思います。

まず、博物館は調査研究が主体とならなければ、博物館としての存在意義を喪失してしまうということです。このことは、博物館人ならば、分かりきったことですが、常に肝に命じていなければいけないと思います。学芸員のきちんとした調査研究があって、初めて質の高い展示や講座、観察会などの教育普及活動ができるのです。学芸員の調査研究の程度が、その館の質を決めるといっても過言ではないと思います。これからの博物館は、調査研究の内容の質が問われる時代になり、質の低い館は、結局は内容のともなわない普及活動に陥り、淘汰されていくのではないかと考えます。しかし、博物館における調査研究の重要性の認識が不足しているのが、公立館でいうならば行政当局であろうと思われます。博物館の調査研究の充実のために、学芸員の人員・予算・待遇などの環境を整えなければ、博物館はつぶれてしまいます。

次に、「博物館は誰のためのものか」ということです。公立館であるならば、第一に地域住民のためのものであるということは間違いないでしょう。学芸員は調査研究の成果を、地域社会、地域住民に還元する責務を負っているのです。博物館は学芸員の単なる職場であって、博物館を利活用する主体は地域住民であるべきです。したがって、調査研究も地域住民が主体となって行うことが理想でしょう。学芸員は、本来の調査研究を行うとともに、地域住民が行う調査研究のコーディネーターとしての役割も担う必要があるのです。学芸員は地域住民が行う調査研究に必要な情報を提供し、地域住民が行った調査研究の成果を博物館に蓄積するという形ができることが望ましいと考えます。さらには、学芸員と地域住民とが共同で調査研究に取り組むことができれば、さらに質の高い成果が生まれてくるものと思います。博物館は学芸員による情報の一方的な発信ではなく、学芸員と地域住民との双方向的な関係であるべきなのです。「住民あっての博物館」という視点が欠落すると、博物館は地域住民から見放されつぶれてしまいます。

昨今、学校との連携、総合学習への対応、営利性の追究など、博物館や学芸員に求められる課題は多種多様化していますが、やはり博物館活動を永続していく基本的なキーワードとなるのは、「調査研究」と「地域住民」であると考えます。

子どもたちとふれあうとき

萩市郷土博物館
学芸員 福 田 靖 子

萩市では9月に、どの学校においても運動会が盛大に開催される。大きなイベントである運動会を終えた学校から、「出前講座」の依頼のFaxが入る。「出前講座」とは、3年前学校と地域の連携を図る目的で、市の教育委員会学校教育課が取り組み、2年前からは行政サービスの一つとして、生涯学習課が窓口となり、市職員の派遣を学校だけでなく、地域住民に対しても行うようになった「人材活用」事業の名称である。私は自然科学の担当学芸員として、学校からの、とくに小学校低学年の生活科での依頼が多い。現在、新博物館の開館準備のため、教育普及活動を控えているため、実際に子どもたちと触れ合う機会が減っている。だから、学校へ出かけてゆき、授業のお手伝いをさせていただくのは、緊張はするものの、楽しい時間である。先日も２校、訪問した。

担当の先生と事前に、何をどのような形ですすめるか、打ち合わせをする。その中で、子どもたちの様子がほの見える。ある小学校、市街地の学校ではないのだが、クラスの児童が草花遊びをほとんどやったことがないという。ねこじゃらしの穂を取って根元に近いほうを上にし、手の中に握り隠す。軽く握り換えると、徐々に手の中から穂が顔を出す。「わあ、すごい」「生きているみたい」「どうやってするん？」本当に簡単なことのように思うのだが、20代の先生が「この学校に来て驚いたんですが、こんな遊びも知らない子が結構いるんですよ。」と。

また別の学校で、「ドングリで遊んだことのある人?」と尋ねると、「コマを作ったよ。」「この間、お花の形にしてブローチを作った」「保育園でね、トトロを作ったことがあるよ」と口々に答える。よくよく聞いてみれば、学校や保育園など、公の場でみんなと一緒にやった経験である。おうちの人とドングリを拾うことや学校からの帰り道、友達同士で野の草を摘んで遊んだりすることは少ないようである。放課後、友達との遊びの中でやっていたことを、学校で学ぶ場を設定しなければそれを経験しないまま、大人に親になっていく。

私自身4歳の子がいるが、その子と一緒に外に出て、遊んでやる機会は少ない。だが、彼女を通して見える子どもの世界は大人のそれとは違う。例えば、「たんぽぽ＝黄色」だと思う大人は多い（と思う）。だが、2、3歳の子どもの中には、たんぽぽの色を尋ねると、「白色」と答える子もいる。その子たちは、在来種であるシロバナタンポポをイメージしてはいない。たんぽぽの白い綿毛のことを思うのである。道端にあるたんぽぽの白い綿毛に息を吹きかけて飛ばす、この遊びが楽しいのだ。そして、綿毛を持つ植物は、みんな「たんぽぽ」である。

幼稚園や保育園、学校はもとより、あらゆる場所で子どもが自然とふれあう場を設け、経験させることが求められている。そういった場に先生として招かれ、自分の幼い日のわずかな経験ですら、話したり、やってみせたりすると、子どもたちの目の輝きが変わる。きっとどなたも経験されていることだと思うが、その瞬間がたまらない。ずっと目を輝かせてもらえるような取り組みやかかわり方について、館として、学芸員として、また一人の親として、考えている。

末筆となりましたが10年勤続に対する表彰ならびに、このような寄稿の場を与えてくださった皆様に感謝いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

10年を振り返って

徳山市立動物園
技術吏員　重　永　和　美

早いもので、動物園に勤務して10年が経ちました。当時、技術係〈飼育〉の女性職員は私だけで殆どは飼育歴30年という大ベテランの男性職員でした。短大を出たばかりの私は、家畜についての知識は若干あるものの、野生動物については全くの素人で「まずは動物園にいる動物の名前から覚えなさい。」と指示されました。それから少しずつ観察の仕方、餌の種類、習性などを教えてもらったり本で調べたりしながら覚えていきました。しかし、それとは裏腹に死なせてしまったり、または逃がして大騒ぎになったりと先輩職員に迷惑のかけっぱなしです。中々、自分の思い通りに動物は動いてくれません。失敗の目立つ私は「本当にこの仕事が続けていけるのだろうか？」と不安な毎日でした。

そんななか、『ペンギン』と『なかよしコーナー』の担当になりました。「ペンギンのヒナが見てみたい。」との一心から繁殖についての資料や本を参考に、巣材の竹枝を長めに切ったり、巣穴にはなるべく近づかないなどの工夫や配慮をしました。すると、しばらく繁殖していなかった一羽が私の用意した巣材で巣を作り産卵し、そしてついに待望のヒナを孵化させました。その時の喜びは今でも忘れられません。

そして、『なかよしコーナー』では、来園者にウサギやヒヨコなどの温かさを直接抱いて実感してもらう“ふれあいタイム”を設置しました。「わぁー、心臓がドキドキしてる。」「来て良かったね。また、来よう。」などの感動と喜びの声を直接聞いた時、「伝える」という事の楽しさを知りました。

この時から「もっともっと、来園者の方に動物のすばらしさをわかってもらいたい。」という気持ちが強くなりました。

現在、世界ではかつてない環境破壊が進み、また教育現場では子ども達に「生きる力」を育むための完全週休2日制が導入されました。このような現状を踏まえて、動物園には“娯楽の場”から絶滅に瀕している種を繁殖させ、動物園で得た研究成果、技術などを生息地での保全に役立てるという「生息地外での保全」、また、動物を通して自然環境の大切さを五感を使って学んでもらう「環境教育」といった“自然保護センター”への役割が強く求められるようになりました。

ペンギンの前に立つ来園者は、テレビや本などでその生息地や、姿、形、更には能力まで簡単に知ることができますが、特有の匂い、プールに飛び込んだ時の水しぶき、羽毛の軟らかさまでは教えてはくれません。動物園ではテレビや本からでは伝わらない多くの感動や驚きがいつでも味わえます。

野生からの使者である動物の持つ能力、行動を限られたスペースの中でどこまで最大限に引き出せるか、またそれら動物の教えてくれた感動、驚き、尊さをどうやって来園者に伝えるか、10年経った今、新たなスタートラインに立ったような気がします。

豊浦町烏山民俗資料館

平成8年より烏山民俗資料館は、それまでの個人資料館から豊浦町立の烏山民俗資料館として新たなスタートを切りました。

当館の特色の一つは、もともと個人資料館であったため、個人の趣味が色濃く出ているという点にあります。それは、日本全国をまわって収集された焼き物や郷土玩具などといった多くの工芸品の展示で見ることができます。それらの展示品からは、決して飾るために作られた美術品ではなく、庶民の生活の中に備わる「美」を発見し、そのような「美」的感覚によって構成されたものであるということが発見できるでしょう。それらは普段使いの中にこそ美しい物が存在するという、民芸の心を大切にした一個人によって収集された品々であり、現在の私たちに「もの」が本来有する健康な力を語りかけてきます。

さらに町立の民俗資料館となったことで、それまで町が収集した町内の民俗資料を始め、長年にわたる遺跡の発掘調査から出土した遺物の数々なども収蔵され、現在保有する資料は約3万点にも及びます。また、町内の様々な文化財の調査や新たな収蔵品の収集を行い、文化の情報発信源として活動することにもなりました。

今年度は既に「川棚条里跡第三次調査発掘速報展」「ちょっと昔のガラス展」「豊浦町の遺跡展」など数回の企画展を実施しています。また、川棚温泉に関する資料の収集や聞き取り調査を行い、新たな常設展示として豊浦町を代表する川棚温泉とその時代背景を当時の写真や様々な展示品から紹介する「川棚温泉とその時代展」も開催しています。そして刊行物では、豊浦町のさまざまな文化財や当館の館蔵品を紹介した情報紙として「とようら探訪」や当館の企画展情報や活動内容などを掲載した季刊紙「とようら文化通信」などを発行しております。（どちらも烏山民俗資料館内にて無料配布）

今後、当館の多分野にわたる展示品を町内の住民以外に観光客など多くの方々に楽しんでもらえるよう、民俗・民族・民芸・歴史・考古など様々な分野の企画展を開催し、多くの刊行物を発行する予定としております。また、遠方の方々に対してはホームページ「豊浦町仮想博物館」において烏山民俗資料館・埋蔵文化財・町内の文化財散策・年中行事などを御覧いただけるよう開設しております。

今後も烏山民俗資料館は、他の民俗資料館と違う独自の視点と裾野の広さを併せ持つ資料館として活動する予定としておりますので、ぜひ当館の展示を一度御覧下さい。

藤原義江記念館

平成14年度から、加入させていただきました。どうぞよろしくお願いします。

藤原義江記念館は、関門海峡を望む紅石山の中腹にあり、安徳天皇の御陵のある赤間神宮、フクで有名な春帆楼の西に位置しています。建物は、元英国領事公邸で藤原義江の父・ネール・ブローデイ・リードが住んでいた由縁があり、下関にとって貴重な建物であるところから、昭和57年に英国から赤間神宮が買収し、譲り受けたものです。庭に楓の木があったことから“紅葉館”と称され、親しまれていました。

藤原義江記念館として開館しましたのは、昭和58年（1983）で、このほど開館20周年を迎えました。

藤原義江は、下関で父ネール・ブローデイ・リード、母坂田キクの子どもとして生まれ、“われらのテナー”として、世界的に有名なテノール歌手であり、藤原歌劇団を創設し、日本にオペラを根付けさせたことは、みなさんご承知のとおりです。

藤原義江記念館には、藤原義江の懐かしい赤盤レコード・洋服・写真・楽譜・パンフレット・母坂田キクの愛用した筑前琵琶、蓄音機、遺品のスプーンなど約200点が保存・展示されています。

なかでもレコードは、彼の生涯で発売された約110枚のうち80枚を収蔵し、国内でも最大のコレクションとなっています。もちろん、アメリカのビクター社が日本人歌手で最初に吹き込んだ、赤盤レコードも含まれています。このように、藤原義江に関する資料のコレクションでは、国内唯一の資料館となっています。

また、藤原義江記念館では、ご命日の3月22日に義江の音楽鑑賞コンサートなどの催しも展開しています。さらに、友の会を組織し、年1回会報を発刊、会員の親睦と芸術文化の振興にも寄与しています。

加えて、出版活動では藤原義江記念館開館20周年を記念し、記念館の秘蔵資料と田辺聖子さんや古川薫さん、永六輔さんのエッセイなどを収録した『藤原義江記念館「紅葉館」』も、発刊しています。

開館20年を経て、藤原義江記念館はこのように内容を整えてきましたが、館から望む関門海峡の風景もまたすばらしいものです。みなさまのご来館をお待ちしています。

光市文化センター

光市文化センター
館長　西岡純二

光市文化センターは昭和55年に開館し、現在は人間でいえば少し成人を過ぎた年齢（年月）というところであろうか。

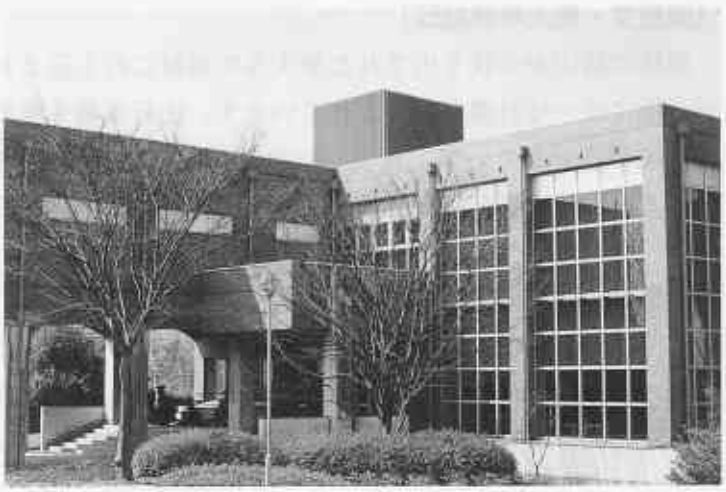
館の建設当時は地方の時代、文化の時代といわれ、物の豊かさより心の豊かさへ大きく変革を求められた時代であった。このような時代背景もあり、昭和53年の光市制施行35周年を機に、歴史民俗資料館建設の構想が持ち上がり、その名称を「光市文化センター」として、文化芸術を含めた複合的施設としての機能を併せ持つ計画とした。そのことから、ふるさとの歴史学習の場、深い芸術的情操の高揚を図る美術の場、さらには理科学習を中心においた科学の場としての文化施設の建設に至ったものである。

施設概要は、歴史学習の場として歴史民俗資料室、一般市民が発表の場としても利用できる美術展示室、科学展示室、また文化講座等に利用できる研修室、そして地下には資料収集のための収蔵庫などとなっている。現在、科学展示室は自然科学部門だけ残し、美術展示室として模様替えをし、主として館蔵美術品を常設展示している。

設立当時から現在まで、美術品部門の資料収集においては、館の特徴を出していくためにも、光市ゆかりの作家の作品を主として収集している。その他歴史民俗部門の収集においては、建設当時に市民の多くの方からの寄贈や寄託を受け、現在は主として歴史部門の資料収集に重点をおいている。なお、昨今は経済情勢の低迷から予算面での制約もあり、資料等の収集活動には厳しい状況となっている。

今年度の主な事業として、美術展で「山口県立美術館絵画貸出事業」を開催した。山口県は三方を海に囲まれ、光市も美しい海岸線を有し、豊かな自然に育まれ生活している。この自然環境を芸術家は海を通してどのように作品に表わしているのだろうか。そのような思いから作品テーマを「自然の情景―海」とし、海及び郷土の新しい魅力を再発見することをねらいとした展覧会とした。郷土作家の小野具定、小林和作、松田正平など、展示テーマに沿った作品が展示され、鑑賞できるということは当文化センターだけでは企画できない展覧会であり、今回このような展覧会が開催できたことで県立美術館関係者には心からお礼を申し上げたい。

今後とも当館の運営に当たっては、歴史民俗関係では館内展示をさらに工夫し、学校週5日制や総合的学習、郷土研究の場としても活用しやすい、また美術など芸術にも親しまれる複合的施設として充実を図ってまいりたい。



阿弥陀寺文化財収蔵庫

阿弥陀寺文化財収蔵庫
館長　林　寛孝

「阿弥陀寺文化財収蔵庫」

阿弥陀寺は文治3年（1187年）東大寺再興の俊乗房重源上人により後白河法皇の現世安穏を祈願し、東大寺の「周防別所」として創建された寺です。収蔵庫には、その当時の貴重な遺品が収められていますので、主要な品をご紹介します。

鉄宝塔

[国宝・鉄宝塔（水晶五輪塔共）]

重源上人が願主となり、建久8年（1197年）、東大寺の大仏を鋳た日本鋳師を代表する草部是助・是弘・助延たちにより鋳造された、総高約3mの鉄製多宝塔です。屋蓋部・塔身部・基壇の三部を分鋳し組み立てています。塔身部には、空・風・火輪と水・地輪の二つに分離し、水輪の中に5粒の仏舎利を納めた水晶三角五輪塔が安置されています。基壇の四面には、阿弥陀寺の四至・本尊・堂塔・諸社の造立の趣旨・勧進・奉行檀那などの名、造立年・鋳物師などの記録が詳細に陽鋳されています。

[国重文・重源上人坐像]

重源上人坐像

重源上人は、治承4年（1180年）に焼失した東大寺再興の大勧進職として、文治2年（1186年）周防国の国務管理、材木調達のため周防国に下向し、佐波川上流の用材を奈良に運び、東大寺を復興し、建永元年（1206年）86歳で入寂された傑僧であります。

この像は像高約89cm、檜材一木造りで、日本最古の寿像といわれよく老僧の風格を現し、鎌倉彫刻の特色がうかがわれます。重源上人と関係が深かった快慶一派の作と伝えられています。

[国重文・東大寺鉄槌印]

周防の杣山から伐り出された東大寺の用材に打ち込まれた鉄印で、柄には一寸目盛りが刻まれています。山行事職を務めた橘奈良定家が守管していて、寛文5年（1665年）領主右田毛利就信の請により、阿弥陀寺に寄進されました。

東大寺鉄槌印

[国重文・紙本墨書阿弥陀寺領田畠注文並免除状]

正治2年（1200年）十月、重源上人は阿弥陀寺の寺領として、吉敷・佐波・都濃・熊毛などの諸郡の国衙領から25町9反の田畠を寄進されました。巻頭には重源上人の花押が、巻末には目代春阿弥陀佛をはじめ、権介多々良弘盛以下の在庁官人45人の連名が記してあります。

歴史のサロンをめざして

おおすみ歴史美術館
副館長　江　戸　康　尹

山口市湯田温泉の一角にある当館は、歴史が好きな大隅企業の大隅健一社主が蒐集した長州を中心とする書画の展示施設で、今年で開館以来満6周年を迎えました。

ちなみに“維新じいさん”と呼ばれる大隅社主は当年92歳、ハダカ一貫から身を起こした立志伝中の人物で、今なお歴史書を愛読し、今年10月にはこれまでにもよく出かけている中国へ旅立ち、旅順の戦跡を訪れました。

さて当館は展示室わずか100平方メートルのミニサイズですが、小粒ながらも長州の歴史専門店ともいえるでしょう。いつもは幕末の志士や山口七人の総理の書、雲谷派の画などを展示していますが、今年4月には企画展「湯田温泉の歴史展」11月には「山口鷺流狂言の歴史展」を開いています。

当館の特色は、展示品を見て頂くだけでなく、私どもと来館者のふれあいを目指している点でしょうか。来館者があれば、オーナーの大隅老や私が一人一人に挨拶し、展示品を解説したり、質問に答えることにしています。もちろん二人とも歴史の専門家ではありませんが、わからないことは私が歴史家や公立館の学芸員にお聞きし、後日に回答しています。

つまり、来館者はモノ（展示品）とヒト（館関係者）に触れて頂き、またレファレンス・サービスを心がけています。小回りのきくミュージアムだからこそできるサービスでしょう。

当館の大隅正和館長は大隅企業の専務ですが、若手の企業家だけに、開館して間もなくインターネットのホームページを開きました。その効果は大きく、館の存在が全国に知られ、メールも少なくありません。

メールや手紙での問合せ、質問も多いのですが、中でもいささか困ったのは名古屋の小学校6年生から担任の先生を経由したメールでした。

「木戸孝允を調べていますが、禁門の変とは何か、教えてください」というものです。そんなことは地元の歴史の先生に聞きなさいと答えるのはたやすいのですが、意を決してこの難問？に取り組み、わかりやすく回答しました。礼状をもらって苦労も吹っ飛びました。

来館者の礼状のファイルを繰ってみますと「お陰で維新の歴史サークルを立ち上げました」（滋賀の青年）、「山口への旅は、日本人として忘れてはいけない魂に触れる旅だったと察します」（埼玉の中年男性）、「私が彼ら（維新の志士たち）に励まして頂いたと思いました」（富山の女性）などです。

いささか自画自賛になる手紙で恐縮ですが「美術館と名のつく施設は数々あれど、貴館ほど来館者に親切な館は二つとないと思います」（広島の女性）というものもあります。

若者は歴史に無関心—といわれますが、全国に歴史ファンがたくさんいることを実感しています。

「メトロポリタン美術館は全てのアメリカ人の遊び場でなければならない」とはトーマス・ホーヴィング元館長の言葉です。

おおすみ歴史美術館も皆さんが楽しくひとときを過ごし、歴史談義に花を咲かせるサロンであり続けたいと思っています。

「大草原の小さな家―ガース・ウィリアムズ絵本の世界」展を開催して

下関市立美術館
学芸係長　中　村　美　幸

下関市立美術館では親子で美術館に親しんでいただく企画として、ここ十年近く絵本原画の展覧会を開催しています。今年は「大草原の小さな家―ガース・ウィリアムズ絵本の世界」（会期 平成14年8月23日～10月6日）を開催しました。これは、『しろいうさぎとくろいうさぎ』の絵本や『大草原の小さな家』シリーズの挿絵などを手掛け、精緻であたたかい画風で知られるアメリカの画家ガース・ウィリアムズの作品を紹介し、さらに『大草原の小さな家』の物語に描かれた家族のきずなを作品を通して見てもらおうとするものでした。会期の前半は「クマのプーさん絵本原画展」を同時開催しており、また夏休み期間中だったこともあって多くの家族連れで賑わいました。

会場では、子供たちの絵を楽しむ態度が実にさまざまです。母親（今回はお祖母さんの姿も目立ちました）の話を聞きながら一緒に鑑賞する子、絵本で親しんでいる絵を指差しながら熱心に見ている子、作品に向かって突進し看視員の肝を冷やす子等々。

ある日、建物の外で大きな声が聞こえました。館内で喧嘩を始めた兄弟を父親が諌めているのです。美術館は静かに作品を見る所だから他人の迷惑になるようなことをするな、と言葉は少々乱暴でしたが、親が子供にきちんとマナーを教える姿勢をうれしく思いました。

また会期も終盤に迫ったある日、ガース・ウィリアムズの熱烈なファンだという若い女性がインターネットで情報を得て、広島から駆けつけてこられました。彼女は熱っぽくそれぞれの作品について語ってくれましたが、最後にガース・ウィリアムズの絵の魅力は奥行きがあることだ、彼の作品は絵の向こうの世界を感じることができる、と語っていました。確かに『大草原の小さな家』の作品の中で新しい土地を求めて旅をするローラー家の前に広がる大草原は遥かかなたローラたちの新しい生活を期待させます。小さい頃から母親に絵本を読み聞かせてもらったり、機会あるごとに本を与えられたというこの女性はそれだけ作品が発するエネルギーを受容し、それを感動に変える力を持ち合わせているのでしょう。

絵本は子供が始めて出会う芸術だ、と言います。絵本を手がける作家たちは子供のための絵だからといって決して手を抜くようなことをしません。一つ一つの小さな画面の中に確かな技術と情熱をもって子供たちに夢の世界を繰り広げます。この展覧会が子供たちにとって一つの出会いとなり、美術や文学に触れ合う機会を広げていくことができれば、と思います。

会期後半の土、日曜日は市内の図書館や学校、文庫などで活動をしておられるお母さんがたの絵本の読み聞かせや人形劇などの催しを行いました。小さい子供たちの気持ちがだんだんお話の世界に入り込んで、きょろきょろしていた頭も前方に釘付けになっていく姿が印象に残りました。

学校週五日制や総合的な学習の時間の導入に伴い、学校教育における美術館・博物館の役割が注目されています。子どもたちの輝く瞳を見ながら、その役割の一端を担うべく今後はより積極的なアプローチを行いたいと考えています。